

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)
大学院学生研究
2016年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学	研究科	フランス文学	専攻
研究代表者 (2017年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年			氏名	
	文学研究科 フランス文学専攻 博士課程後期課程4年			中田 麻理 印	
指導教員	所属・職名			氏名	
	文学部 教授			澤田 直 印	
自然・人文・社会の別	自然	・	人文	・	社会
個人・共同の別	個人		・ 共同 名		
研究課題	ジャン・ジュネとヘンリー・ジェームズの比較研究 —空間・自我・セクシュアリティ—				
研究組織 (研究代表者・共同研究者) ※2017年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・学年			氏名	
	立教大学文学研究科 フランス文学専攻 博士課程後期課程4年			中田 麻理	
研究期間	2016 年度				
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 196,029 円 / (採択金額) 200,000 円				

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究では、フランス20世紀の作家ジャン・ジュネ(Jean Genet, 1910-86)と、19世紀の米国で活躍した作家ヘンリー・ジェームズ(Henry James, 1843-1916)の作品を比較し、両作家に共通する主題を見出すことで、作品に対する理解をより深めることを目的とした。両作家は時代も場所も異なるが、文学作品におけるセクシュアリティという点に着目するとき、ともに注目すべき作家である。そのため、両者の比較に際しては、共通するテーマをもとに比較する対比研究の方法を試み、空間・自我・セクシュアリティをキーワードにジュネの中編小説『花のノートルダム』と、ジェームズの短編小説『懐かしの街角』を比較した。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[対比研究] [空間] [セクシュアリティ]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

1. 立教仏文学会に向けた研究と成果の概要

本研究において比較対象とするジャン・ジュネとヘンリー・ジェイムズは、活躍した時代も地域も異なる作家であり、一般的にはほとんど無縁であると考えられている。そのため、両者を比較の俎上に載せる対比研究は非常に挑戦的な試みであったが、立教仏文学会という場で発表の機会をいただき、貴重な交流の場を持つことができた。以下、

(1) 学会での発表概要 (2) 研究交流を通して得た副次的テーマ に分けて記述する。

(1) 立教仏文学会での発表概要

ヘンリー・ジェイムズ『懐かしの街角』(1908)とジャン・ジュネ『花のノートルダム』(1944)を、閉鎖的な「空間」という共通のテーマを通して比較した。

『懐かしの街角』はジェイムズのいわゆる「幽霊もの」の一つであり、主人公が自身の「分身」を追い求める顛末が描かれたものである。本研究では、その「分身」を生み出す特別な空間としての屋敷に着目した。主人公が「分身」に邂逅した屋敷は、彼が幼年時代を過ごした場所である。彼はそこにおいて幼年時代に立ち返ることで、「もう一つの世界」を見出し、自分のなっていたかもしれないもう一つの姿としての「分身」を見出すのである。またその場所の描写が母胎を思わせるものであることから、主人公が幼年時代までさかのぼり、再度生まれ直す場所としての屋敷の役割が指摘できる。

以上を踏まえ、ジュネの『花のノートルダム』に見出されるいくつかの閉鎖的空間と比較した。ジュネもある種の閉鎖的空間を、母胎のような場所として捉えている。ただしそれは自己の深部に向かい、人生を語るための空間、すなわち物語の生まれる空間である。ジュネの場合この空間と語りの在り方は、セクシュアリティを作品化する彼の手法と深く関わるものである。ジュネは『花のノートルダム』の物語を独房の語り手の個人的な夢想として語るがそれは独房という空間の閉鎖性によって触発されるものである。そこで語り手は、それを通して彼自身が愛し合うことができるような「恋人たち」の物語を紡ぎ出す。同性愛を客観的視点ではなく語り手の欲望の発露として描くことで、ジュネは同性愛を自らのうちに引き受けるのである。

ジュネもジェイムズも、閉鎖的で母胎のような空間を物語の重要な部分に位置付けている。ジェイムズはそれを得体の知れない「分身」の現れる場所としたが、ジュネは同性愛的欲望を自分自身のものとして語るために援用した。ジェイムズの「分身」に対する一つの解釈として、得体の知れない欲望の表れと考えることも可能である。つまり、ジェイムズの時代にはそれを語る言葉がなかった欲望である。ジュネに関してもそういった状況が大きく異なるわけではない。ジュネの時代にも同性愛について語るための文脈があったとはいえ、それを作り上げる必要があったのだ。ジュネとジェイムズに共通点があるとすれば、それはこうした語る言葉のないものを語るという試みであろう。

(2) 発表の場で得た知見と副次的テーマ「身体」と「恥」

発表では閉鎖的空間と母胎の類似性を指摘し、その点についてジャック・ラカンの「胸像段階」を用いた分析を試みたが、そうした解釈は飛躍であり不適切であるとのご指摘をいただいた。そのため、その後の研究においてはこうした分析は排除し、よりテキストに寄り添った読解を心掛けた。同様に、空間に溶け合う人物の「身体」についてもラカンの「寸断された身体」として解釈していたが、それも見直すこととした。ジュネ作品における身体の現れ方については次への課題とした。

発表を通して得られたもう一つの副次的テーマは「恥」の問題である。『花のノートルダム』では独房と農家の屋外便所が、語り手の夢想の場所とされている。これらの場所には母胎を思わせる表現が多用されるため、当初は外界から切り離され、他者を排除した安心をもたらす空間という側面を強調していた。しかし、独房と便所のどちらにも悪臭の描写があるという点をご指摘いただいた。悪臭に関する言及は、作風やテーマの大きく異なる中期・後期の作品においても通時的に見られることから、看過すべきではない。悪臭に着目すると、語り手に安寧をもたらす空間が、社会的には汚物を集めた場でしかないというアイロニーが読み取れる。そしてジュネにおける空間を問題化する場合、このアイロニーの方が重要である。なぜならジュネが経験し作品化したのは、孤児として、犯罪者予備軍の浮浪少年として、あるいは同性愛者として排斥され、身を置いた社会の周縁部の環境であるためだ。悪臭の描写は、そこでジュネが味わった恥辱の感情の表れであり、より重要な問題につながるテーマとなりうる。

さらに、悪臭が「恥」となる場合、そこにはにおいを纏い、感じ取る身体が介在する。そのような視点から「身体」の問題を読み解くことができるのではないか。こうした着想から、「身体」と「恥」という観点から『葬儀』におけるジャンヌ・ダルク表象を読み解く研究を構想した。

研究成果の概要 つづき

2. 上記の研究の成果を踏まえたその後の研究の進展

研究のコーパスを『花のノートルダム』から『葬儀』に移し、「身体」と「恥」をテーマとしてジャンヌ・ダルク表象を読み解く新たな研究を始めることとした。ジュネは歴史小説を書いたわけではないが、第3作目の小説『葬儀』において、戦場の情景から連想される処刑台のジャンヌの姿をおよそ1ページにわたって描写している。この短い特徴的な場面を分析することで、ジュネにおける「身体」「恥」を女性表象の問題との関連において読み解こうとするものである。

研究の概要は以下の通りである。まずジュネがなぜジャンヌ・ダルクという形象を選び取ったのかという点について考えるため、前作である『薔薇の奇蹟』『花のノートルダム』におけるジャンヌへの言及箇所を検証した。これら2作におけるジャンヌは「神聖な人物」あるいは「殉教した」聖人といった位置づけである。しかし、そのような用い方だけでは、他の聖人でなくジャンヌを選び取った理由を見出すことができない。鍵となるのは『薔薇の奇蹟』における「ジャンヌ・ダルク家族」ではないかと考えた。『薔薇の奇蹟』の叙述によると、ジュネが実際に思春期の2年半を過ごしたメトレ感化院では、AからHまでのアルファベットの冠された各「家族」のほかに、「ジャンヌ・ダルク家族」が存在した。そして「ジャンヌ・ダルク家族」に属する少年たちは全員が、他のいずれかの「家族」の少年の「ハゲタカ」だった。「ハゲタカ」という語は、他の少年に性的身体を所有される愛人の立場を意味する。こうしたメトレの在り方は、同性愛者であったジュネによる創作であるように思われがちだが、少なくとも「ジャンヌ・ダルク家族」という呼称が実際に存在したということは、他の資料から裏付けられる。このことから、ジュネの用いるジャンヌ・ダルクという形象にはメトレの記憶が影を落としており、ジュネが『薔薇の奇蹟』で描いた性を介したヒエラルキーと結びついているのではないかと仮説を立てた。

以上を踏まえ、続いて『葬儀』におけるジャンヌの読解を行った。ジュネが描くのは処刑前夜に月経の血を流すジャンヌの姿である。このイメージは、少年民兵リトンの意識を通して現れる。この場面に注目した先行研究では、ジャンヌに関する描写を独立したイメージとして分析の対象とすることが多いが、本研究ではジャンヌはメトレの少年たちの形を変えた姿であるという仮説から、この少年をめぐるエピソードとの関連を重視し、ジャンヌのイメージはのちに展開されるドイツ兵によるリトンの強姦の場面を暗示するものであるという見解を示した。一連のイメージは「恥じらいが臭うぞ」という指揮官の発言をきっかけにリトンの脳裏で展開されるが、指揮官の奇妙な発言には2つの意味がある。第一にそれはリトンの悪臭の指摘であり、それに対しリトンは恥じらいを覚える。第二に、「恥じらい」という語には女性の貞潔という含意があるために、女の存在が暗示される。つまりこのやり取りは、屈強なドイツ兵の中においてリトンが強姦の対象になりうるのだと気づくのちの場面を暗示するものであり、その状況は男装して兵団に参加していたジャンヌの状況とも重なるものである。

月経の血を流すジャンヌというイメージは、歴史家のジュール・ミシュレが提示した、月経のない聖処女のイメージを反転させ、女の身体から逃れられないジャンヌを提示したものである。股から流れる血を隠そうとするジャンヌの動作には恥じらいの感情が読み取れる。それは、隠すべきものを強制的に暴かれてしまいう暴力性を示唆するものでもある。またこの場面では悪魔や魔女への言及によって、ジャンヌがすでに処女を失っている可能性が暗示されており、その背後にあったかもしれない強姦の場面を読み取ることも可能である。最後にジャンヌは、女性器の高さに血の染みをつけたまま処刑台に上るが、その周囲にはそれを眺める司祭や軍人たちが配置されており、そのことから視線の暴力性が強調される。この場面は、血を流すジャンヌを通して身体を強制的に暴かれてしまう暴力を描いたものであり、その点においてリトンの強姦を描いた場面とも類似性を見出すことができる。

最後に、本作におけるヒトラーの描写にこの場面の反復が見られることを指摘した。敗戦するドイツと運命を共にするヒトラーは、ジャンヌの血の染みと同じ高さに血塗れの傷口をつけていたのだと述べられているのである。戦時下においてジャンヌの形象はナショナリズムを高揚させるためにヴィシー政府やレジスタンスの象徴として用いられる傾向にあったため、ヒトラーとジャンヌを結びつけることでこうした文脈は反転させられている。またそれだけでなく、この描写は身体と戦争の次元を結びつけるものである。ジャンヌと同じ位置、つまり女性器の位置に傷を持つということは、ヒトラーの身体の女性化を暗示する。本作におけるヒトラーは、男性的能力を欠いた存在として描かれる。それは、戦争をめぐる言説において、敵国がしばしば女性の身体に見立てられることと関連する。本作におけるヒトラーの性的身体の在り方は戦況と連動しており、最後には血の染みをつけて敗戦を迎えるのである。以上の分析を通し、略奪される性的身体とそれに伴う身体感覚を通して戦場を描いたのが『葬儀』という作品なのではないかという見解を示した。その点において、性の相克的関係を描いたジュネの初期作品と、戦争や暴力をテーマとした中期・後期作品には一貫性を見出すことができる。上記の内容は日本フランス語フランス文学会の関東支部において発表した。

※この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

④-1. 学会発表

立教大学フランス語フランス文学会第5回大会

2016年6月4日(土曜日)

於：立教大学

「空間・自我・セクシュアリティ：

ジャン・ジュネ『花のノートルダム』とヘンリー・ジェイムズ『懐かしの街角』の比較を通して」

④-1. 学会発表

日本フランス語フランス文学会関東支部大会

2016年3月4日(土曜日)

於：東京外国語大学

「ジャン・ジュネ初期作品におけるジャンヌ・ダルク」